

# 「柳田国男年譜」作成の現場から(上)

— 敗戦までのこと 二題 —

小田 富英

## 一、はじめに

私は、筑摩書房から刊行中の『柳田国男全集』編集委員として、二〇一九年三月、「柳田国男年譜」(『柳田国男全集』別巻I)を発表しました。「年譜」は本来ならば最終巻の予定でしたが、「補遺編」「書簡編」の刊行を待たずの上梓となりました。最終的には、柳田の書誌年譜と合体した検索と修正追加可能なデータ版として公開できればと考えています。今まで発表された三〇ほどある「柳田年譜」の代表は、鎌田久子作成の『定本 柳田国男集』「年譜」(以下「定年譜」と、後藤総一郎監修・柳田国男研究会編著の『柳田国男伝』「年譜」(以下「伝年譜」)です。「定年譜」は、鎌田久子が、柳田自身の日記をもとに、学問的

な事項に絞って作成したものと

言われています。「伝年譜」

は、私も含め一人の柳田国

男研究会のメンバーによる

一七年に及ぶ共同研究の成果

です。『柳田国男伝』執筆や

「年譜」作成に行き詰まった

時、後藤先生から、「出来は

六〇点でよいけれど、三〇年

もつものをつくろう」と檄を

飛ばされました。その三一年

目に、「新年譜」を発表でき

たこと、不思議な縁を感じ

ています。もとより、次の年

譜を作る者が自分になるとは

思ってもいませんでしたし、

今も完成形年譜の途上と思っ

ているので、本連載の表題を

「作成現場から」とし、皆さ

んからのご批判も含め情報を

お寄せいただきたいと筆を執

りました。

二、昭和二〇年八月一五日

## の条から

最初に、敗戦の日の記述について触れてみます。柳田が記し続けた日記のなかで、刊行された数少ない日記として『炭焼日記』があります。日記全文は、すでに全集に収録しているのですが、どの部分を「年譜」に採用するかが第一のハードルとなります。

『炭焼日記』八月一五日の

条は、すでに多くの人が引用

している「十二時大詔出づ、

感激不止。午後感冒、八度二

分。」の短い言葉です。これ

を「定年譜」は、「終戦の詔

勅を聞き、「感激不止」と述

べている」と書き、私たちの

「伝年譜」では、「終戦の詔

勅を聞き、「感激不止」と日

記に記す」と主体から見た文

体にしています。「伝年譜」

の成果は、八月一日と二二

日の情報を次のように書き加

え、「感激不止」に繋がる柳

田の心の動きを表現したこと

でした。

「八月一日、長岡隆一郎

から敗戦の情報を知らされ、働かねばならぬ世を痛感する。

八月二日、堀一郎宅を訪ね、戦後にむける決意のほどを語る。堀から「神社と祭祀」の本を借りる。午後、木曜会。

敗戦の事実を会員に告げ、「大いに働かねばならぬ」ことを説く。

こうした流れのなかで「感激不止」の「感激」については、益田勝実の『炭焼日記』「存疑」の見解で言い尽くされていると思われま。益田

は、柳田の『炭焼日記』の不思議な構造を「存疑」としながらも、「沈み切った心」(柳田「窓の燈」)が新しい意欲に燃えている構造において、

敗戦当時の柳田国男を見いださねばならない」と絶妙の賛辞を送っているのです。こう

なると、年譜作成の第二ハードルは、柳田の冷徹な学問観と、人間柳田国男の「沈み切った日」の過ごし様の両面から偽らない描写ができるかと

いうことになりました。余談ですが、年譜作成の作業中、私は何度も、「柳田国男の喜怒哀楽」といったタイトルの本を創りたいと思ったものです。

そんな中で見つけたのが、柳田国男を囲む「武蔵野を語る」という座談会でした。昭和三〇年(一九五五)九月一日発行の『俳句』誌上に掲載

されています。これは、荻窪の角川源義自宅で行われ、参加者は、柳田、角川の他に、加藤秋郎と山本健吉の四人です。話は、柳田が愛した野川

を中心に、武蔵野の愛すべき風景についての柳田の思いを聞き出している興味深い座談会です。このなかで、戦火の被害となった鬼子母神境内の櫛の木の話に続けて、柳田は

次のように述べています。

「柳田 それはいいよいよどうも…。私は八月十五日の日だつたけれども、非常にきれいな日なんです。空の工合

が……。ぞつと見てみると、それは涙がポタポタこぼれるんだな。だれも見てゐないんだ、一人だけでもつて、野川の上流の……。

加藤 どうしても野川に行かねばならん。(笑声)

柳田 この美しい山水を下駄ばきのやつが飛んで歩くんだからね。」

ここからというところで、柳田の合の手が入り、柳田の発言が途絶えてしまっています。この発言を年譜に入

なくてはと考えました。一時は、「感激」は「感涙」だったのではと思ったりしましたが、柳田自身が目を通して

るわけですから直せるものではないありません。『炭焼日記』刊行は、この座談会のあとの昭和三三年秋のことです。刊

世界です。「野川の上流」もどの辺のことなのか、聞いてみたい衝動にかられますが、私は考えたあげく、「八月一日」の条を次のような文にしました。

「八月二十五日 終戦詔書の放送を聞いたあと、ひとり野川沿いを歩き、空を見上げると、自然と涙がこぼれてくる。家に戻り、「十二時大詔出づ、感激不止。午後感冒、八度二分。」とだけ日記に記す。」

澄み切った青空を飛ぶ米軍機を、「下駄ばきのやつ」と眩いた柳田の気持ちも再現しなかったのですが、そこまでは書きませんでした。

### 三、「大いに迫害を受けた」 発言の検証

次に、「年譜」作成上の難関ハードルのひとつ、情報の錯綜から確定できないけれども、落とす訳にはいかない例を紹介しよう。

柳田は川島武宣との対談のなかで、「教育勅語を批判

したと言つて」「大いに迫害を受けた」と発言しています

〔婚姻と家の問題〕『展望』

昭和二十四年一月。これが、何時、宮城の何処で、何について講演なのかわかつていないのでした。錯綜する情報

の第一が、「定年譜」の昭和一〇年六月二十五日〜二十一日の東北旅行の項で、「一六日、石巻の小学校で、「史学の自治」を講演」です。二つ目の情報が、井伏鱒二の「柳田さんのこと」(『現日文 柳田国男集』月報一七、脱稿昭和

二九年一月)で明らかにされた証言で、それによると講演は、昭和一四年秋のことになります。証言者は、港町(石巻)の露江さんとあります

が、石巻日日新聞社社長、佐藤露江(当時記者)のことと思われまゝ。第三の情報が、当時、石巻中学校の英語教師で、のちに民俗芸能の研究者となつた本田安次の「柳田先生のこと」(『定本 柳田国男集』月報一五)の思い出で、

「赴任の翌年」と言うので、昭和五年のこととなります。

「港町の露江」さんと本田安次の証言には大きな違いはないものの、時期でおよそ一〇年の開きがあり、なおかつ、憲兵が自宅まで来たのか、仙台の憲兵隊本部に呼び出されたかがはっきりして

いません。佐藤露江が書いたであろう「石巻日日新聞」が残っていればよいのですが、残念ながら未見です。時期ははっきりしませんが、様子は伝わりまゝし、柳田の教育勅語批判の論点も伝わってきます。神島二郎は、「柳田

国男の学問と思想」(『民俗学研究所紀要』第九集、昭和六〇年三月)において、これらの情報を見事に整理して次のように述べています。

「一九三九年の秋でしたか、東北の石巻小学校で講演をしていますよね。柳田さんはそこで教育勅語に言及して、これは有難い教典ではあるけれども、忠孝をはじめとし

て、上下の倫理について説いているだけで、どうも物足りない。人類愛や社会愛といった対等者間の倫理が述べられていないのは、大きな欠陥だといったわけです。当時こんなことをいうのは、大変なことなんです。」

しかし、柳田日記から特定したと思われる昭和一〇年六月説を覆す根拠が不足です。昭和一〇年説には、その前後に折口信夫と石巻の毛利総七郎に宛てた葉書もあります。

譜」を生かし次のように書き込みました。「」は今後の検証事項)

「六月一六日 石巻小学校で開かれた、石巻教育会の講演会で、「史学の自治」を講演する。その中で、教育勅語を批判したと問題になり、仙台の憲兵隊に呼び出される。〔本田安次は昭和五年、井伏鱒二、神島二郎は昭和一四年説。また、憲兵が自宅に聴取に来たという話もある。〕」

## 「柳田国男年譜」作成の現場から(中)

— 一首の短歌から広がる世界 —

小田富英

一、短歌を詠んだ日を確認する

前回は、年譜作成の上で基本的な、一日の過ごし様の表現について紹介しました。言うなれば、点の表現です。私は、いつからか、年譜作成の醍醐味は、点を線に、線を面にするということを感じるようになってきました。最終的には、面が重層して立体的になってきたことを実感したものです。今回は、点が線になり、線が面となった第三のハードルのひとつをご紹介します。

柳田国男の短歌は、『定本柳田国男集』にも数多く発表されています。その後、来嶋靖生先生の地道な研究で四百首を越える短歌の制作の背景が明らかになっていきます。それでも未だ制作年月日不明も多くあり、そのなかの一

首、「木がぐれにさゆりなでしこさくといふ たまの夏山なつかしきかな」もその一首でした。この短歌には、「七月青梅に住める大下氏の許へ」という前書きがあり、来嶋先生の調査で、明治三四年に詠まれた歌というところまではわかっていました。

ただ、この大下氏は何者なのかとか、七月何日なのかというところまでは不明で、私も東京帝国大学卒業生名簿で、大下を探したものでした。ところが、ある時、柳田国男のお孫さんの南八枝子さんからメールをいただき、その大下が水彩画家大下藤次郎であることがわかったのです。島根県立石見美術館のホームページで水彩画家大下藤次郎の日記が公開されていて、その中に松岡(柳田)国男の名前を

見つけたというのです。

早速検索してみましたら、「明治三四年七月八日、東京より柳田国男君ら来らる」と日記に書いてあることがわかりました。ということでも、「年譜」の「明治三四年七月八日」の条に、「青梅に転居した水彩画家大下藤次郎を訪ね、『木がぐれにさゆりなでしこさくといふ たまの夏山なつかしきかな』の歌を詠む。」と書き込めることができました。ここまでは、前述の点の表現なのですが、問題はここからです。この大下藤次郎という画家との出会いはいつか、「たまの夏山なつかしきかな」という「なつかしきかな」の意味は何かと疑問が湧いてきます。

## 二、次弟松岡静雄と大下藤次郎との出会い

幸いなことに、大下日記は、次々に『石見美術館紀要』で公開され、出会いからその後の交流がはつきりしてきました。

明治三十一年の三月一七日から九月一六日の間、松岡(柳田)国男の弟静雄が南洋オーストラリアへの遠洋航海に出ます。静雄は、前年の秋、海軍兵学校を首席で卒業したばかりで、初の遠洋航海となるわけです。静雄の乗る軍艦金剛に、大下藤次郎が同乗するのです。水彩画家の道を歩み始めていたものの、若い友人たちの中で埋もれていた大下は、その悩みを志賀重昂に相談し、志賀の南洋航海体験談に刺激を受けることになりました。志賀はこの時、「天然の儘なる風光に接する事を得べく景色を専らとする美術家に極めて好箇の材料あるべし」(「大下あけぼの日記」)と説いたといえます。大下は、その言葉を励みに軍艦に同乗するために奔走し、明治美術会特派員としての便乗渡航の許可を得ることができたのです。この軍艦金剛の見送りに、松岡国男も横須賀にいますが、この時はまだ大下と

国男は出会っていません。この時の国男の横須賀行きについては、明治四〇年、田山花袋の手によって発表された「大学生の日記(作者未詳)」(『文章世界』第二巻第三号)によって明らかになっていきます。この日記についてここでは紹介できませんが、「柳田国男全集」第二三巻に収録してありますので、「解題」と合わせてお読みください。

この遠洋航海で大下は、「如何なる困難、如何なる障碍に逢ふも屈する事なく」(「大下日記」)進んでいくと、強い自信を抱くことになるのですが、それは、南洋の「天然の儘なる風光」に刺激を受けただけでなく、松岡静雄をはじめとする海軍士官たちとの友情もあつたようです(土居次義『水彩画家 大下藤次郎』美術出版社、昭和五六年)。

柳田国男を真ん中にした松岡五兄弟の結束については、様々なところで論じられていますが、この静雄と末弟輝夫

については、どちらかという  
と柳田の側からの働きかけが  
主として語られてきました。  
静雄に関しては、日蘭交流や  
南洋民族学、輝夫(日本画家  
松岡映丘)に関しては、画家  
にするための応援などです。  
静雄の渡航の折りの記念写真  
も残っていて、それを見る  
と、国男が独歩や松本丞治な  
どの友人たちに呼びかけて静  
雄を囲んでいることがわかり  
ます。

そうした兄弟の結束の逆の  
パターンで、静雄の方から兄  
の国男に、自分が親しくなっ  
た大下藤次郎を紹介したので  
しょう。大下は、森鷗外や国  
男の友人の洋画家和田英作と  
も親しく付き合っていたの  
で、大下の方から、国男に会  
いたいと言ったのかもしれない  
せん。

明治三十三年一月九日で、「松  
岡国男、松岡静雄両氏来り語  
らる。」とあります。柳田は、  
この時まだ東京帝国大学卒業  
前の身で、柳田家への養嗣子  
の話が出はじめた「悩み多き  
青年詩人」の頃でした。その  
あと、「大下日記」には、次  
のような出来事が続きます。  
「一月二七日 中央気象台に  
岡田氏を訪ひて不逢。  
一月二八日 初めて田山録  
弥氏に面会し、風景論で盛り  
上がる。  
二月一六日 中央気象台に  
岡田氏を訪ひ雲の説をきく。  
四月五日 布佐にゆき松岡  
氏に投ず。桃花の図一枚を得  
たり。  
九月三日 独乙に軍艦受  
取にゆかれし松岡少尉帰朝訪  
問さる。」

目は、国男の抒情詩の対象女  
性、伊勢いね子が亡くなった  
三月九日から日も経たない  
四月に、布佐の鼎宅に大下  
を滞在させていることです。  
そこで、大下は桃の花の絵を  
描いたと書いています。さら  
に、「大下日記」には、「七月  
一八日 田山家で独歩に会  
う。」との記述もあり、国男  
の紹介で大下の人間関係が大  
きく広がっていくことがわか  
ります。

私は、この「大下日記」か  
らの情報を、「柳田年譜」に  
次のように反映させました。  
「一月九日 小石川区関口駒  
井野町に住む水彩画家大下藤  
次郎を静雄と共に訪ねる。こ  
の後、大下は、田山花袋、岡  
田武松に会ったり、四月に布  
佐の鼎宅に世話になってスケ  
ッチしたりすることになる。」  
この大下の動きはすべて、  
松岡(柳田)国男の助言、紹  
介であるわけです。こうした  
流れのなかでの、前述の明治  
三四年七月の短歌だったわけ  
です。大下藤次郎にとって  
も、六月に『水彩画之葉』を  
刊行したばかりで、水彩画家  
としての自信漲る日々のこと  
でした。

四、「たまの夏山なつかし  
きかな」の意味  
さらにこの歌には、次の事  
実が隠されていることに気づ  
かされます。それは、今から  
二〇年以上も前に、牛島盛光  
先生が、柳田の『後狩詞記』  
序文の一行をヒントに調べた  
事実と重なります。明治三二  
年の夏、奥多摩の古里村村長  
福島文長の峰集落にある自宅  
に世話になり、狩りの話を聞  
き、羚羊の角で作ったパイプ  
をもらうなどの体験をしてい  
たことです。牛島先生の調査  
で、この福島文長村長は明治  
七年生まれということで、国  
男とは一歳しか違わず、この  
時すでに妻子をもち村長とし  
て活躍していたのです。柳田  
は、この時の印象を『後狩詞  
記』で次のように述べること  
になります。

「字峰といふ所に、峰の大尺  
本名を福島文長といふ狩の好  
きな人が居る。十年前の夏此  
家に行つて二晩とまり(略)  
此の家の縁に腰を掛けて狩の  
話を聞いた。」

牛島先生が、椎葉村採訪の  
潜在的動機がここにあると指  
摘されたのは発見でしたが、  
残念なことに、この時「たま  
の夏山」の歌は意識されてい  
なかつたと思われれます。

国男の大学卒業の明治三三  
年を挟んだ、三二年の「たま  
の夏山」と、三四年七月の大  
下の新居への訪問の二つの事  
実は、柳田の人生の岐路に大  
きくかわつていふことを暗  
示していると思うのです。

こうして、点が線となり、  
線と線が交差して面となつて  
「年譜」のかたちになつてく  
ることをおわかりいただけだ  
かと思いますが、これから先  
の面が重層し「立体的な実  
像」照射が、今後の柳田研究  
の課題であるはずと提起して  
次回に繋げたいと思います。

## 「柳田国男年譜」作成の現場から(下)

「点」の発見から「等身大」の柳田像へ

小田 富英

一、新たな書簡の発見から

筑摩書房の机を借り、年譜情報のデータ入力をしていたある日、全集編集部の本木克俊さんから柳田の書簡が見つかったとの話を聞きました。

お住まいの千葉版の新聞の記事に出ていたとのことでした。それは、平成二十四年(二〇一二)一月二十四日付け『朝日新聞』「ちば首都圏」版で、「柳田国男の手紙 我孫子で発見 手賀沼干拓に功績 井上家の当主あて」の見出しで、手紙の写真付きの記事でした。一部を紹介すると以下の通りです。

「我孫子市布佐で手賀沼干拓に取り組んだ井上家の住宅から、市ゆかりの民俗学者・柳田国男の手紙が見つかった。東京帝大(東大)同期で、土木技師として活躍した井上家

の当主にあてた紹介状だ。(略)手紙の宛先は12代当主の井上二郎(1873-1941)。東京帝大で土木を学び、井上家の養子に。青年時代、布佐にあった長兄の家をしばしば訪れた柳田とは帝大同期の仲だ。(略)手紙は和紙に毛筆でつづられた封書。「先日は久々にて御物語承り」と書き出し、日光の寺住職を友人として紹介。川

のほとりの道路工事について「御説話なし被下度折入御願申上候」と協力を求めています。住職に井上あての手紙を持たせたとみられる。(略)

我孫子の文化を守る会会長の藤井吉弥さんは「おそろく川の堤防が崩れ、住職の修理の依頼を柳田が井上に取り次いだのだろう」と推測する。手紙の最後に「八月四日」とあ

るが、年代は不明だ。」

「年代は不明」とありましたが、私が作成中の年譜データを見ますと、これは明治三六年七月二三日から、柳田家家族絵出で日光照尊院に滞在した時のものとわかりました。

照尊院は、学生時代から田山花袋に連れられて来た馴染みの塔頭で、住職菅原英信とも親しい仲でした。牛込加賀町の柳田家では、この夏、新婚の国男たちのために、自宅の改築工事をする事になりました。避暑を兼ねて照尊院に世話になっていたのです。

不明の年代は明治三十六年のことと、山本さんから朝日新聞千葉支局に伝えてもらいました。折り返し、井上家の調査をしている守る会の方から、見に来てほしいとの話があり、山本さんと布佐の井上家を訪ねたのです。

## 二、井上二郎との交流

井上家では、我孫子市史研究センターと我孫子の文化を守る会の方々が、井上家文書

の整理にあたられていました。そこで、井上家ご当主の

奥様井上千鶴子さんから、井上家に伝わる貴重なお話を伺うことができたのです。大学時代、松岡国男と井上二郎は仲が良く、布佐に帰ってくる時、井上家の土蔵でよく本を

読んでいたという話でした。布佐の友人と言えば、岡田武松にばかり目がいき、井上二郎(東京帝国大学工科大学土木工学科卒)が国男の友人ということは知りませんでした。

布佐の方々にとって、この国男、武松、二郎の三人は、「布佐の三傑」と言い伝えられるほどの存在であったのです。私が知る井上二郎は、

モースさん(『近代化への挑戦―柳田国男の遺産』日本放送出版協会、一九七七年刊)の著者、ロナルド・A・モース)が発見した、布佐竹内神社境内の「日露戦争旅順陥落記念」の英文碑の建立者名からでした。手賀沼干拓の功労者として理解していたのです

が、それはこの後のことで、

柳田との関係から名を連ねたと考えるのが自然だと気づきました。ということと、「柳田年譜」に初めて、井上二郎の名前が登場させることができました。以下は、その部分です。

「明治三十六年(一九〇三)八月一日 日光滞在中、栃木県の土木技師となっている大学の友人、井上二郎に会い、旧交を温める。

同 八月四日

照尊院の住職菅原英信に頼まれ、井上二郎に、大谷川の堤防の修理を依頼する手紙を書き、菅原に託す。

明治三十八年(一九〇五)一月一日 鼎、静雄ら七人の連名で、旅順陥落の日を記念して、布佐の竹内神社に桜の木五百本を寄付し、この日付けの戦勝記念碑を建立する。(完成は一〇月ごろ)兄弟三人以外の建立者の大澤岳太郎は、のちに乾政彦の義父となり、もうひとりの井上二郎は、東

京帝国大学時代からの旧友であつた。」

この井上二郎について調べてみると、生まれは茨城県藤代の横瀬家次男で、学生時代に井上家の養嗣子となり、井上まさと結婚しています。卒業後の国男が決断した、人生の選択と同じ道を先に歩んでいたわけです。このあたりのことは、今後の課題と指摘するに留めておきます。

### 三、柳田晩年の伊藤葦天との交流

連載の最後ですので、柳田国男晩年の様子を伝える資料を紹介します。

神奈川県川崎市の登戸に、丸山教の本庁があります。「定年譜」「伝年譜」いずれにも、この本庁で行われた橋浦泰雄の還暦祝いや、柳田国男の講演会についての記述はありませんが、その関係には触れていません。私が日本地名研究所のイベントとして、「柳田国男と登戸」の地名探訪を案内した時のことです。丸山教本

庁を訪れ、八木正さんから多くのご教示をいただくことができました。三代教主伊藤葦天との関係や、教団誌『神の光』などの資料からわかってきたことを入れた年譜が出来、橋浦泰雄の還暦記念の日には、次のように書き込むことができました。

「昭和三十三年（一九四八）一月一四日 登戸の丸山教本部で開かれた、橋浦泰雄の還暦記念祝賀会に出席する。淡沢敬三、今和次郎、折口信夫、上野勇、小林存、永井龍一ら三十人あまりが集まり、冒頭の挨拶で、「辛抱強いものにも驚く」と橋浦を評する。この会は、戸田謙介（大魚）が、佐藤紅緑門下であつた関係で、丸山教三世教主の伊藤葦天の好意によつてもたれた。この時、初めて伊藤に会う。」

なぜ、橋浦のお祝いの会が丸山教であつたのがわかりました。今まで、橋浦の関係とばかり思っていたのですが、戸田謙介の関係、さらに

は柳田と佐藤紅緑とのつながりも伏線となつていたわけですね。この後、伊藤葦天と柳田は、伊藤の『初瀬とこれさまと五反田節』に掲載する「榎戸懐古」でより親しく付き合うことになりました。柳田が伊藤に心許していた証拠に、昭和二十九年三月、丸山教祖六十天祭での講演「世々の父母」を引き受けたことがあります。このことはすでに多くの方が論じていますので、伊藤の思い出話からの逸話二つを年譜として紹介することになります。

「昭和三十〇年（一九五五）六月 この月の初め、来日中のハーバード大学エリセーフ教授を連れて、登戸紀伊国屋に食事に行く。同行したのは、松本信広、堀一郎で、店に着いてから伊藤葦天を呼び出す。話のなかで伊藤とエリセーフに共通の知人（袖利）がいたことを知り、こんな愉快な邂逅はないと喜ぶ。終了後、エリセーフが泊まってい

る帝国ホテルまで送る。

同

一二月

この月の初めの小春日和の日、一人で登戸まで散歩に出て、丸山教本庁を訪ねる。伊藤葦天と死後の魂の行方について語り合う。その中で、夜よく眠れなくて困るが何かいい法がないか聞くと、五時間眠ればいい方で年をとるとそんなものだと言われる。」

エリセーフについては、柳田自身、『故郷七十年』『エリセーフ父子』のなかで、この紀伊国屋でのことを次のように懐古しています。

「店の主人が「どうか一筆、記念のためにぜひ」といって来た。断るかと思つて見ていると、筆を使い、懐から用意の印形を取り出した。まったくの日本通である。」

次の一二月のエピソードも印象的です。この日の前か後の一二月四日、柳田は、自分の手で閉鎖することを決めた民俗学研究所の代議員会を紀伊国屋で開きます。「無力な

民俗学研究所は解散し、学会の発展に主力を注ぐべし」という解散案を提案し、可決された日なのです。四日の前であれば、この日の散歩は決意の確認、後であれば、振り返りの機会であつたのでしょう。いずれにしても悲しみの決断であつたわけですから、葦天との何気ない会話で癒やされ、ついつい長話になつてしまつたと考えられます。

### 四、おわりに

まだまだ書きたいことはあるのですが、一応、第一弾ということに筆を置きます。

『柳田国男全集』別巻Iを刊行した後、何人かの方からお便りをいただきました。その中で驚いたことは、若い人たちが喜んでくれたことと、見落としていた資料、文献のご教示を受けたことです。とりわけ、書簡もいくつか発見され、まだまだ出てきそうな感じですね。この場をお借りして、改めて資料提供のお願いをさせていただきます。